

大学街およびその生活環境の歴史的形成・変化に関する日欧比較
—ベルギー・ルーヴェンと日本・早稲田を中心として—

代表 真辺将之（早稲田大学文学学術院教授）

〔研究報告要旨〕

本研究では日本の大学街とヨーロッパの大学街との、歴史的な形成ならびに変化のあり方、および現在の状況を比較検討することによって、大学街がどのように形成され、それが学生や教職員の生活といかなる形でかかわり、またそれが現在どのような問題を抱えているのかを分析・検討しようとしたものである。そのことは、今後の日本の大学と周辺地域との環境整備のあり方を考える上でも貴重な材料となりうるであろうと考える。

序章で本研究の問題意識を提示したのち、第一章では「大学都市ルーヴェンの歴史」と題し、オランダ語や英語の文献をもとにしながら、大学都市としてのルーヴェンの発達史、そして教員・学生の宿舎として利用され研究代表者も実際に利用・滞在した「大ベギンホフ」の歴史、さらにそうした大学都市の歴史がどのように現在の学生生活・意識に反映されているのかを記述した。特にルーヴェンカトリック大学在学の学生にインタビューを行った成果を盛り込んだことが特筆できる。ついで、第二章では、研究代表者が在籍する日本の早稲田大学を事例に、大学街としての早稲田の歴史と現況について、その概要を記述した。

以上をふまえて、終章において、双方を比較した上で見えてきたものについて検討した。特に、現在でも学生街として、街のなかで大学が大きなプレゼンスを持っているルーヴェンに対し、早稲田は、東京の他の学生街が衰退するなかで比較的近年までその姿を保ってきたものの、近年大きく変容しつつあることをふまえ、ルーヴェンに学べるものは何か、という視点から、歴史的経緯を踏まえてまとめた。特に、たとえば大ベギンホフを全体として大学が買い取り、全体を宿舎として整備しているように、単に個体ではなく、群としてあるいは地域として、全体的な構造を意識したうえでの街づくりを意識していること、街との一体感を形作るためにさまざまな工夫を行っていることなどは、日本の大学街あるいは都市計画全般にとって、学ぶべきことなのではあろうと論じた。